

第3回 英語によるコミュニケーションスキルの磨き方 国際議長・幹事を目指す方々のために

齋藤 輝

日本事務機械情報システム産業協会コンサルタント（非常勤）
ISO/IEC JTC 1/SC 28（オフィス機器）議長



1. 議長就任の経緯

日本アイ・ビー・エム社定年退職後、同社嘱託として勤務していた2002年春、当時の日本事務機械工業会JBMA（現・日本事務機械情報システム産業協会JBMA）から次のような話があった。すなわち、「ISO/IEC JTC 1/SC 28（オフィス機器）の幹事国ブラジルはここ数年セクレタリー業務のデフォルト状態で、投票案件などの滞りがひどく、メンバー国がみな困っている。何度催促しても暖簾に腕押し状態、しかしこれは見方によっては日本が幹事国を代わって引き受けるよい機会なのでブラジルを説得して降りてもらい、SC 28に受け継ぎを提案するつもりだ、もしそうなった場合議長を引き受けてもらえないだろうか」ということであった。嘱託期間も残り1年、ちょうど幹事国移譲が完了するとタイミングに合いそうだということもあって即応諾した。

筆者は、日本アイ・ビー・エム社定年直近の8年間、同社の標準担当を命ぜられ、JISC（日本工業標準調査会）情報部会、情報処理学会・情報規格調査会などを中心に標準化関連団体に対する会社の窓口として関連委員会に出入りしていた。JBMAもその一つである。ここでちょっと私事になるが、実はその8年間も含めて、密度の濃淡はあるものの、長年にわたって情報技術中心に標準化活動を続けてきたことが認められて2004年春の褒章で藍綬褒章を頂く荣誉に浴した。

国際議長という重責を引き受けることに逡巡しなかったかと問われれば、否である。なぜか。それは本稿の主要テーマとして後ほど触れることにする。



Standards Australia での議長スピーチシーン

2. SC 28のプロフィール

SC 28の最近の主だったプロジェクトは、①プリンタのトナー、インクカートリッジの印刷可能標準ページ数測定法、②デジタルコピー、プリンタの生産性（throughput）測定法、③モノクロプリントアウト画質属性測定法などで、JTC 1（情報技術）傘下で最も製品寄りの具体的な案件を取り扱うSCの一つとなっている。①は2～3年前の情報ではISO中央事務局直販扱いTOP 100売れ筋ISO標準の一つとなっているが、公正取引の観点から一部外国政府筋の期待が大きかったこともあり、メーカーの関心も高いのであろう。

最近パスした新規案件に、④カートリッジの特性（characterization）というマルチパート標準案があるが、このプロジェクトに対するメーカーの高い参加意欲は今までなかったことだ。メーカービジネスの消耗品への高い依存度、独立系再生カートリッジメーカーの台頭などが背景にあるものと思われる。しかし、仕事はまだ緒についてばかりであり、最終成果物の姿がおぼろげにも見えてくるのはもう少し先になる。

現在SC 28のPメンバーは14か国、Oメンバーは16か国でJTC 1の中でも小さめなSCである。オフィス機器のメーカーは大部分が日本と米国、一部韓国と欧州に偏在しており、特に日本での集中が際立っている。産業としては隆盛なのに、NP成立条件は参加国数のカウント閾値“5”であるため、過去NP投票は綱渡り状態が続いた。しかし昨年、JTC 1でもIECのルールに準じてPメンバー数が16かそれ以下のSCは、閾値“4”をクリアすればよいことになったので、今後は参加国数不足によるNP failのケースは減るものと思われる。

3. 余暇にコミュニケーションスキルの練成

さて、ここでなぜ国際議長引受けに全く逡巡しなかったかという話に戻る。答えは、英語での議事進行や、パブリックスピーキングが全く壁にならなくなる余暇の使い方を長年にわたって続けてきたからである…という前触れで紹介するのがトーストマスターズ・クラブ（Toastmasters Club、以降TMCと省略する）である。

ひとりに比べるとかなりクラブ数が増えてきたとはいえ、まだ日本での認知度があまり高くないのは残念であるが、一言で言えば、英語によるコミュニケーションとリーダーシップ・スキルの涵養を目的とするクラブで、Toastmasters International（TI）本部がクラブ第1号発祥の地、米国カリフォルニア州に置かれている。そのクラブの設立が1924年というから、85年になろうという歴史のある非営利の教育的団体である。創立者Dr. Ralf Smedleyが、話し下手の若者が多いことを憂慮してYMCAの地下室で始めた活動が原点となっており、現在米国を中心に世界約90か国、1万を超えるクラブを通じて20万人に及ぶ会員を擁する大きな組織になっている。クラブ数は米国が圧倒的に多く、知名度も高い。それは、人には使う言語によらずステージ恐怖症があり、英語のネイティブスピーカーにとっても、それを克服してオバマ大統領のように人前で堂々と効果的な話をするのは決して容易なことではないということの証左でもある。

日本では最初のクラブが1956年に設立され、数年前Districtに昇格するレベルのクラブ数“60”に達し、現在District 76として約80のクラブを擁するまでになった。基本的には英語のクラブであるが、すべて日本語、さらには日英両方の言葉で例会を前半後半に割って行うバイリンガルクラブも増加傾向にある。筆者は1988年にたまたま友人に誘われ、横浜TMC設立のためのモデルミーティングに出席して、日本人スピーカーの飛び抜けた英語のうまさ、美しいほどよくできたミーティング形式に鳥肌が立った。即入会し横浜TMCの創立期の活動を楽しんだ。2年後今度は自らが創立会長となって田園都市トーストマスターズ・クラブを立ち上げ、以来今日に至るまで18年間在籍して活動を続けている。

これからの説明でわかってもらえると思うが、TMCは、失敗し、かいた恥を肥やしに成長していくためのいわばコミュニケーションスキル練成ラボなのである。なお、トーストマスターズという名前だが、洒落なスピーチで場を盛り上げることを期待される役目の、乾杯 (toast) の音頭をとる人という意味である。

4. トーストマスターズ・クラブ例会ウォークスルー

クラブでは具体的に何をやるのだろうか、典型的な月2回(第2・第4土曜日)、1回2時間の田園都市TMCの例会をのぞいてみよう。まず定刻14時にPresident(クラブ会長)が開会を宣言し、当日のゲストを紹介する。続いてSecretary(クラブ秘書)に振り、前回例会の議事録を読ませ、確認をとる。次に前回未決の案件があればそれを審議、続いて新規案件の動議があればそれを審議して約20分、長くて30分のビジネスパートを終える。動議が、意見の割れる深刻なものであれば議事進行規則(Robert's rule of order)を厳密に適用して討論するが、そうでなければ、過度に形式にこだわることはない。ビジネスパートで議論することは、会費、役員選挙等である。当日新規入会者の入会が予定されていれば、入会式が行われる。入会者による義務履行誓約の読み上げと、クラブメンバー側からの受入・支持誓約の読み上げなど、日本人は最初やや戸惑うフォーマルな儀式となる。なお、3回ゲストで出席すると入会資格が得られるルールになっている。

ここから先が当日の総司会者“Toastmaster of the Day (TMoD)”が取り仕切る教育的パートとなる。TMoDの司会で最初に紹介されるのが“Jokemaster”, 3~4分使っておもしろいことを言って場の雰囲気を和らげるのがその役目である。次に紹介されるのが“Table Topicmaster”, あらかじめ用意してきた4,5個のトピックについて「これこれのことにあなたのご意見は」と言ってランダムにメンバーを指名する。指名されたらその場で立って1~2分まとまった話をしなければならぬ。これはプログラムの次のアイテムがprepared speeches(準備・練習してきたスピーチ)であるのに対し、impromptu speeches(即席スピーチ)の訓練をするためのものである。このスピーチは、英語のネイティブスピーカーにとってもやさしいものではないので、あまり高遠で難しいトピックは避ける配慮が求められる。Table Topicを当てられると、アウーと言っている間に2分間が過ぎてしまったり、終わって座った途端、後知恵でああ言えばよかった、こう言えばよかったと反省しきりになるが、失敗して恥をかくためのラボラトリーだと、しっかり自分を納得させておかないと、なかなかつらいセッションである。

さて、次がその日のプログラムのハイライト、prepared speeches sessionである。メンバーになるとカルフォルニアの本部から“Communication and Leadership Program”というマニュアルが送られてくる。これには例えば5番「身振り・手振りをどう効果的に使うか(Your Body Speaks)」とか、9番「力強い説得(Persuade with Power)」など10個のスピーチプロジェクトが載っており、それぞれについて目的、スピーチの組立て方、ポイントなどについて説明されている。prepared speakerは少なくとも2週間前にアサインされるので、その間自分の進捗に応じたプロジェクトでテーマを決め5~7分のスピーチをつくり、練習してきてその日に臨むのである。この役割にアサインされるのは3,4名である。ここでは自分の職業、趣味などに^{うんちく}蘊蓄を傾けて話をするメンバーが多いので結構耳学問になる。

次に続くのがTMC独特の教育的セッション、論評セッションで、これを取り仕切るのが“General Evaluator (GE)”である。四つのprepared speechesがあるなら4名のEvaluatorsが、それぞれあらかじめだれのスピーチを講評するのか割り当てられている。GEによって紹介されたEvaluatorが順に壇上に上がり、一人3分の講評スピーチをする。スピーチプロジェクトの目的をどう満たしていたのかいなかったのか、よかった点、改善を要する点など、権威的に聞こえることがないように気遣ってうまくまとめるのが上手な講評である。聴衆の耳にどう響いたのか、目にど



トーストマスターズ・クラブ例会シーン

う映ったのかはスピーカー自身にはわからないので講評がなければ改善しようがない、これはほかにはない TMC の売りである。Evaluator の立場からするとスピーチを聞く、短時間でポイントを整理する、発表するという集中が求められる作業になるので楽ではない。

このセッションの最後に GE が当日のプログラム全体に対する講評を行った後、TMoD に議事進行権を戻すのである。そこで TMoD 最後の仕事になるのだが Table Topic speech, Prepared speech, Evaluation speech のそれぞれの部門でだれが最優秀であったかを発表し、トロフィーを授与するのである。実はそれぞれのセッションが終わる都度 vote counter が出席者全員の ballot slip による投票を集計しているのである。与えられた時間を使いきれずに終わったスピーチ、オーバーして終わったスピーチは投票対象から外される。そのため timer がアサインされ計時している。表彰を終えると TMoD は議事進行権を会長に戻す、会長はゲストに短いコメントを求める、さらに時間があれば、その日一度も口を開く機会がなかったメンバーにコメントの機会を与える、という流れで閉会するのである。

もう一度言うがこれをすべて英語でやるのである。これを何年か続けていけば、「国際議長？はい、やります」とスルッとと言える自分を発見するのである。

こうして TMC 例会プログラムを眺めてみると、3 レベルの入れ子構造になっており、それぞれのレベルで司会者 (President, TMoD, GE) がいる、即席スピーチ、準備してきたスピーチ、講評スピーチがある、とできるだけ多くのメンバーが役割をもって例会に参加できるように実によく編成されていることがわかる。その上ビジネスパートでは議事進行規則による討論も経験できるのである。これだけであればトーストマスターズの組織に Area, Division, District などの階層構造はあまり必要ないのだが、実は各レベルで毎年スピーチコンテストが行われ、勝ち上がっていくと最後は米国で開催されるパブリックスピーキングの世界チャンピオンを決めるコンテストヘントリーできる仕組みになっているのである。

相当のスペースを TMC の説明に割いたが、現職、将来の国際幹事、国際議長、専門家の皆さんの中で、もしもう少し口頭による英語力を何とかしたいと思っている人がおられたらぜひ一度クラブ例会をのぞいてみてほしい。どこにどんなクラブがあるかなどわかる URL を本稿の最後に載せておくので参考にしてほしい。どこでもゲストは歓迎していて飛び込みで差し支えない。クラブによって異なるが会費も英会話学校とは比べ物にならないくらい安い、非営利だし先生はいないのでから当然といえば当然だが…。

5. 標準専門家育成にトーストマスターズ・クラブの利用を

これから国際幹事や議長になろうとする人は、当然 ISO/IEC Directives, 当該 TC/SC のプロジェクトとオペレーションには詳しいはずであり、日本規格協会による教育・訓練もあるのでそちらの面で何かアドバイスを思いつくことはない。

残るは英語によるコミュニケーション能力の補強である。そのため TMC を詳しく紹介した。寡聞にして知らないが ISO/IEC は、国際議長・幹事に求められる英語によるコミュニケーション能力について何がしかのポリシーをもっているのだろうか、幹事国任せか。JISC 2007 年策定の国際標準化アクションプランによると、「専門家の育成と活用」が重点項目の一つになっている。当然英語による議事進行を含むコミュニケーション能力向上も避けて通れない課題だと思われるが、これだけは繰り返し learn by doing (習うより慣れよ) で慣れるしかないスキルなので、座学や 1 回や 2 回のロールプレイはほとんど役に立たない。そのため一步踏み込んだ提案をさせてもらうならば、例えば日本規格協会が、国際標準専門家を中心メンバーとするトーストマスターズ・クラブを創立するというようなことはどうだろうか。新しくクラブを立ち上げて Toastmasters International のクラブ設立認可を得るには一定のルールがあるが、そういう動きがあれば筆者もお手伝いするのにやぶさかでないし、Marketing 担当役員もいる District 76 (日本地区本部) も喜んで支援してくれるはずである。

(参考) トーストマスターズ・クラブ関連 URL である。

○ 田園都市トーストマスターズ・クラブ

<http://home.m04.itscom.net/speech/index.htm>

○ District 76 (日本地区本部)

<http://www.district76.org/>

○ Toastmasters International (国際本部)

<http://www.toastmasters.org/>